

〈企画の趣旨〉

2021年と2022年にわたって開催されるシンポジウム「翻訳としての中世哲学」は、中世哲学を多様な文化圏の対話として理解するという試みのひとつである。「中世哲学」と呼ばれる知的活動は実のところ多様な源泉をもっており、決して閉じた同質的な営みではなかった。このシンポジウムでは、その開かれた中世哲学を翻訳という側面から眺めてみることにする。そのため、ここで提示される翻訳とは、狭い意味での翻訳活動にとどまらず、概念がいかに伝播し、哲学する枠組みや道具立てがどのような変遷をたどっていったかというところにまで目を向けるものとして理解されるべきである。多様な時代、多様な地域において、異なる文化圏を跨って伝わり、読み替えられながら営まれてきた中世哲学に、翻訳というキーワードで新たな光を当てられることができたならば幸いである。

2021年については哲学の出発点でもあり思考のツールとなる論理学を扱う。とりわけアリストテレスの「オルガノン」と呼ばれる著作群の翻訳が中世哲学史をどのように形作ったのか見てゆくことにする。2022年は神学とともに新たな展開を見せることになる形而上学をテーマとする。アリストテレス『形而上学』の「ある」をめぐる議論や「可能態・現実態」といった様相概念の受容・変容の歴史を紐解いてゆく。

アンドロニコスによる「アリストテレス著作集」編纂以来、「オルガノン」はその構成のみならず、哲学的な位置づけをめぐって様々に議論されてきた。それは哲学を行うための道具にすぎないのか、あるいは哲学の一部をなすのか。それは、アリストテレス哲学のための導入なのか、あるいはプラトン主義を頂点とした哲学全体の入り口でもあるのか。共通しているのは、古代より「オルガノン」が哲学の出発点という位置を与えられ、多くの注釈がほどこされてきたことである。

古代末期の知的環境下にあったポエティウスによるオルガノン翻訳・注釈は、いわゆる *logica vetus* の土台となり、初期中世はアリストテレスのテキストを直接読むことなく発展してゆく。また、この時代には『分析論後書』や自然学・形而上学関係の著作も登場しない。2021年はこうした「オルガノン」の翻訳とその不在を中心に取り上げる。

西村洋平が取り扱う後期古代は、ギリシア語の知識を直接もっていた人

たちがおり、実際にギリシア語からラテン語へと翻訳活動が行われた時代である。この時代にアリストテレスの翻訳を行なったボエティウスの翻訳方針を、「オルガノン」へのさらなる導入となるポルピュリオス『エイサゴゲー』の訳・注を取り上げて論じる。それによれば、ボエティウスは古代末期の新プラトン主義的な哲学プログラムを受け継ぎ、プラトン哲学あるいはキリスト教神学を視野にいれた導入として『エイサゴゲー』を位置付けているという。

永嶋哲也が取り扱う初期中世は、一部の翻訳作品しか手許になく、また大規模な翻訳活動が開始する直前の時代であり、この時代においては翻訳の存在よりも、翻訳の不在が大きな問題として立ち現れてくる。永嶋は、アベラールが翻訳の不在という状況のなか、ボエティウスを手がかりにアリストテレスに接近し、そして独自の *imaginatio* 概念を生み出していることを明らかにする。

古館恵介が取り扱う盛期中世は、ギリシアやアラビアからの翻訳運動を経験し、資料的にも初期中世とまったく異なる時代である。初期中世の『命題論』注解に登場する、命題における動詞の「力」という思想は、トマスやオッカムの時代にはなくなることを示される。テキスト・資料の有無が議論の方向性に影響を与えた典型的なケースであるといえる。

連動報告においては、近藤智彦によってヘレニズム倫理学の伝播が取り扱われる。近藤はボエティウス『哲学の慰め』とアベラール『対話』におけるストア派を中心としたヘレニズム倫理思想の利用に焦点を当て、本シンポジウムの中心テーマとなる「論理学」とは異なるテーマで話題を提供してくれる。ボエティウスやアベラールが倫理の領域で、ギリシア的な幸福観をキリスト教的なものに読み替えようとする試みが丁寧に読み解かれていく。

「翻訳としての中世哲学」というテーマはややもするとテクニカルで視野の狭い議論となってしまう。しかし、翻訳というものを狭義ではなく幅広くとらえたときに、古代世界からの哲学思想の伝播、読み替えという視点が複層的に明らかになることであろう。「翻訳」という視点で中世哲学の奥深さを再認識し、それを読み解く面白さを再発見することが本企画の趣旨である。

[2021-22年度シンポジウム企画委員：小村 優太，西村 洋平（文責）]